

# 臨床実習における 指導上の課題と対策

～患者・生徒へのアンケート調査を基にした指導の実践から～

---

宮城県立視覚支援学校 教諭 高橋秀信





# 1 はじめに

今回の実践研究では、過去のアンケート調査を再活用し、現在の生徒と患者に対して改めてアンケートを実施することで、生徒個人のコミュニケーション能力や実技力の比較検討を試みた。





## 2 実践方法

### (1) 実践計画

4月 患者アンケート調査票と生徒の自己評価アンケート調査票の作成。

5月～7月 アンケート調査と患者からの感想等を生徒へフィードバック。

8月 アンケート集計の分析。自尊感情アンケート調査。





## 2) 本校における臨床室の現状

2022年までは、専理2・3年生、専保3年生、本保3年生が臨床実習を実施していた。2023年からは、そこに専保2年生が加わった。

専理3年生は、月・火・木・金の午前中4回  
専理2年生は、木の午後1回  
専保3年生は、水の午前と木の午後2回  
専保2年生は、水の午前1回である。





### 3) 生徒の実態

生徒A：専理3年 50代 女性

中途弱視 入学以前は看護師

眼疾：網膜色素変性症

視力：（右）0.1 （左）0.07

視野：求心性視野狭窄（両）

矯正：遮光機能付き矯正レンズを使用。





生徒B：専保3年 20代 女性 弱視

眼疾：視神經萎縮

視力：（右） 0.05 （左） 0.06

視野：求心性視野狭窄





生徒C 専理2年 60代 女性  
中途弱視・難聴 入学前は薬剤師  
眼疾：増殖性硝子体網膜症 視神経萎縮  
白内障術後 網膜剥離術後  
視力：（左）0.05 （右）手動弁  
視野：中心暗点、視野欠損





生徒D 専保2年 20代 女性 弱視

眼疾：鎌状網膜剥離（両）

視力：（右）0.15 （左）0.1

視野：（右）5° 以内 （左）10° 以内





### 3 結果と考察

(1) 患者評価結果と生徒の自己評価結果の考察  
以下が生徒4名の患者評価と生徒の自己評価  
と考察をまとめたものである。

(調査票は資料1、資料2参照)

生徒4名に対して、33名の患者さんから回答  
を得た。





生徒A.

12名の患者から回答を得た。

全て4点・・・・・・・・・・・・・・・・・・9名

挨拶・誘導／主訴への対応／部位への施術  
／力加減3点・・・・1名

部位への施術3点・・・・1名

挨拶・誘導／主訴への対応／部位への施術  
／症状軽減3点・・・・1名





生徒B

1 6名の患者から回答を得た。

6月中旬から7月中旬：10名

全て4点・・・5名

全て3点・・・2名

力加減：3点／症状軽減：2点・・・1名

挨拶・誘導／主訴への対応／力加減

：3点／症状軽減：2点・・・1名

症状軽減3点・・・1名





生徒C

1名の患者から回答を得た。

全ての項目が4点・・・1名  
(患者と生徒の比較)

生徒は全て3点と患者の評価より低く  
回答していた。





生徒D

6月から7月にかけて4名の患者から回答を得た。

全て4点・・・3名

挨拶・誘導／症状軽減3点・・・1名





## (2) 自尊感情アンケートについて

4名の生徒の中で、自己評価がかなり低い生徒や逆に患者より高い評価になっている生徒がいたことから、自己肯定感について調査することにした。

調査は、昨年本校の服部教諭が行ったものを拝借した。8月末に行ったため、臨床実習とどこまでリンクしているかは不明であるが、以下のような結果となった。

生徒A	24点	生徒B	31点
生徒C	26点	生徒D	24点





(3) 2016年の生徒のコメントから  
今回の患者と生徒のアンケート調査のように  
2016年にも調査を行っている。  
点数は、2016年ものは5点満点で調査して  
いるため、数字の比較はできないと考えコメ  
ントだけを比較してみた。





## 4 まとめ

生徒4名に対し延べ33名の患者から回答を頂いた。患者さんからの感想として、生徒への感想以外に施術回数を増やしてほしい等、2016年の調査と同様の結果が得られた。

